令和元(2019)年「宝石山正覚寺報」7月号

◆ご　案　内

お聴聞は、如来様の促しに遇いお念仏しつつ終にお喚び声に遇わせて戴く大切の営みです。

皆様どうぞご縁におあい下さいませ。

① **仏壮お聴聞の会**7月7日（日）20時～。

仏教壮年会恒例となったお聴聞の会です。皆様賑やかにご縁にお遇い下さい。

② **仏婦例会**7月16日（火）19時半～

月に一度、如来様のお育てに合う大切の機会です。皆様賑やかにお参り下さい。

③ **滋賀組十六日講**7月14日（日）9時半受付

（会所）紫雲嶺西福寺、お客僧は、昨秋の当院報恩講にご出講戴いた藤澤信照師です。

◆蒲生下組親鸞聖人讃仰会から

令和の時代、初めてのご法座が相次ぎます。

６月２９日(土)、住職は、蒲生下組の紫雲山西福寺様で営まれた親鸞聖人讃仰会「聞法の集い」にお取り次ぎに参りました。

お御堂に参りまして見渡しますと、曾て御世話になった方々やご親族からご挨拶を戴き、県内に広がったお法りのご縁の不思議を思わないではおれません。

半月前に提出した構題は「本願の念仏」でした。それは、今日「本願、本願成就」の御法話をしても現代人には伝わり難くなった。これは宗門の危機であり、宗門人は一切の聖域を設けず、応分の責務を果たすべしとの総長訓示が宗報上で重ねて発せられるようになり、不肖も及ばずながらこれにお応えする趣旨に基づきます。

当日、お聴聞の皆様にお持ちしたのは、**「救いの御名のほとけ様」**（りびんぐらいぶず７月第１号）と**「ふと仰ぎ見るお姿は」**の楽譜だったのです。楽譜は、正覚寺で誕生した唯一の本格的な仏教讃歌であることは皆様よくご存じの通りです。

演奏は、昨年自ら試みたのですが、前奏曲や間奏曲は申すに及ばず、お話しながらの演奏はとてもできたものではありません。

そこで今年は、会場の西福寺様に御電話を入れ、「もしやエレクトーンの演奏をお助け戴けないものでしょうか」とお訊ねしますと「うちは、若坊守、孫の三人共演奏できます」との坊守様、ご住職様の誇らしげでお幸せそうなお応えです。讃歌が誕生して五年目の出来事でした。

御法話当日、お聴聞のみなさまにこのように申しました。「自坊や組内のご法座でお話ししますと三分の一位で時間が来てしまいます。自坊ではまたの機会がありますのでそれでもよいのですが、今回は初めて寄せて戴いてこれが最期かもしれません。ですので、お手許に配布させて戴いた『りびんぐらいぶず』に沿って読み上げるようにしてまず最後まで進めさせて戴きます」と御案内して始めますと、一寸皆様の表情が思わしくありません。原稿によってお話ししますとお聞き下さる方々の自然な感情の流れにマッチングしないんですね。おまけに用意したお話が終ったところで、まだ30分近く時間があるではありませんか。これは困った。

「そんなら、ここから後は、原稿なしでお話しましょう」と申し上げてお話させて戴きますと、これが予期に反してみのり多いものになったのです。日頃のお聴聞の会の賜物でした。

お話が終ってお待ちかねの**「ふと仰ぎ見るお姿は」**の若坊守様の演奏は、鍛え上げられたプロの演奏そのもの、八分の六拍子の容易でない演奏、もう一回聞きたいと思って戴くなら、仏教婦人会で合唱団を立ち上げて戴くとよろしいですね。「西福寺様ならできる。」と申し上げて大変お慶び戴いたのでありました。合掌。